

[学会]

第858回千葉医学会例会 第9回神経内科例会

日時：平成3年12月21日(土) 午後2時～午後6時
場所：ホテルサンガーデン千葉(4階・天平の間)

1. MRIで脳表(皮質及び皮質下白質)にGd-DTPA 増強効果を認めた多発性硬化症が疑われた1例

森 雅裕, 榊原隆次, 福武敏夫
得丸幸夫, 小島重幸, 平山恵造
(千大)

症例は視神経炎の後、左半身の痙攣発作・深部感覚性運動失調・不全片麻痺をきたした22歳女性。臨床経過と検査所見から多発性硬化症が疑われたが、Gd-DTPA造影後MRIで多発性硬化症としては極めて特異な、脳表(皮質及び皮質下白質)の線状の増強効果を認めた。従来、大きな脱髄巣を有する多発性硬化症では、“U” fiberをも含む脳表に病変を有することが知られており本例も同様のものであると考えた。

2. アミトリプチリン大量服用自殺未遂による中毒からの回復後に現われた運動失調と小脳萎縮

栗原和男, 菅宮 斉, 川口直樹
(県救急医療センター)
井上雅子
(同和会千葉・精神科)
伊東範行
(県救急医療センター・麻酔科)

症例は23歳、女性。アミトリプチリン約1,250mg服用自殺による急性中毒から回復後、無表情、自発性の乏しい状態(意識、ADLは正常)が改善し始めた約40日目に著明な運動失調(四肢、体幹、歩行、断続性構音障害)、軽度のaction myoclonusが出現。110日目に改善に向かった。経時的なX線CT、MRIで小脳虫部、半球上面に目立つ小脳萎縮が約110日間に進行。Lance-Adams症候群としては非典型的であり、本剤の関与の可能性がある。

3. ステロイド依存性の脱髄脳炎の1例

山口美香, 古口徳雄, 朝比奈真由美
得丸幸夫
(千大)

症例は26歳、男性。経過約2年で、発熱・痙攣発作・右片麻痺を主症状とし髄液細胞の著明な増加を認め、ステロイドが著効したが減量に伴い上記症状の緩解・増悪を繰り返した。病巣は大脳白質を中心とし画像所見からは脱髄性病変が疑われた。本例および類似症例を比較検討し、これらはステロイド依存性に繰り返す髄膜脳炎症状を特徴とし、多発性硬化症・急性散在性脳脊髄炎の再発例とは異なる臨床像をもつ疾患であると考えた。

4. 発症時期不明の脳炎に左不全麻痺を合併した脳梅毒の1例

川口直樹, 下江 豊, 林 正高
(市立甲府)

発症時期不明の脳炎に、左不全麻痺を合併した神経梅毒73歳男性例を報告した。失見当識・不穏・興奮・せん妄等の脳炎様の精神症状と左片麻痺が変動しつつ経過し、ペニシリン治療により両者の改善をみた。本症例は臨床経過と血清・脳脊髄液にて梅毒反応陽性であり、高田・荒反応で脳梅毒型を示したこと及び通常の脳血管障害とは異なる特異な頭部CT・MRIの所見から神経梅毒による症状と考えられた。

5. Reverse ocular dipping (VTR 供覧)

高谷美成, 古本 英晴, 新井 洋
(川鉄千葉)
鈴木潤子, 佐々木憲裕, 明星志貴夫
(同・内科)

症例は42歳、男性。幼児期にページェット病と診断。1991年8月、突然呼吸停止し、低酸素脳症による失外套状態に至った。呼吸停止の原因は環軸偏位による上部頸髄圧迫が疑われた。数週後、眼球が緩徐に上転し、瞬目